

七巡目の戌年を迎え、いよいよ「終活」に励まねばと決意を新たにしております。ベートーベンの交響曲第九番（いわゆる第九）『合唱』に例えれば、第四楽章の『歓喜の歌』に差し掛かった辺りということでしょうか。

少なくとも、生きている間にできることを片付けておくことは、これからの残された人生をどう生きるのかを考えるにあたっても大事です。

1. 鉱物コレクションの寄贈

そこで、まず手を付けたのは、中学生の頃から断続的ながら、南アフリカやブラジルにまで足を伸ばして集め続けてきた鉱物標本の処理でした。これらの450点ほどの鉱物や化石の標本は自宅のガレージを改造して陳列していましたが、時を経るにしたがって、ラベルの文字も掠れて見えなくなっていました。

趣味の収集品でも、絵画や陶器などは売却もできますが、鉱物標本を引き取ってもらえる好事家はまず見当りません。子供たちも相続はしな

いと宣言してしまいますので、要するにマイナスの価値がなくて、下手をすれば捨てられる運命にあります。

幸い同好の趣味の繋がりで、20年前に鉱物博物館の開設に協力をして親しくしておりました「ミュージアム鉱研 地球の宝石箱」さんに、一昨年標本のすべてを喜んで引き取っていただき、一安心したところです。

このミュージアムは民間企業の鉱研工業株が設立した、世界でも珍しい鉱物や化石の巨大標本の展示を中心に、地球を科学する学習目的の博物館です。長野県の真ん中辺り、塩尻市と岡谷市の境にある塩嶺カントリークラブに隣接の「いこいの森公園」の中に建っております。昨年8月には同館の開設20周年記念行事の一環として「岡部陽二 鉱物コレクション」の特別展示が催されました。諏訪湖方面にお出かけの序には、



ミュージアム鉱研「地球の宝石箱」にて

ぜひお立ち寄りいただきたい見どころです。

2. 自分史の執筆

昨年8月に『満州難民の体験記』と題した小学校5、6年生のころの体験録を日本工業倶楽部の会報に寄稿しました。

このエッセーの執筆を思い立ちました動機は、同倶楽部で行われた講演会にて元時事通信記者で日銀副総裁に就かれた藤原作弥氏から、「旧満州・安東市での1年間にわたる難民生活の経験が、その後の生き方に大きく影響した」という趣旨のお話を拝聴したことにありました。

お話を伺って、奇しくも同氏と同じ期間、同じ安東に、私も住んでいたことが判明したのです。ところが、同氏より3歳年長であったにもかかわらず、私の記憶はきわめて希薄でした。また、関係者は物故されていて、当時の状況を確認することも叶わず、参考となるような物証もないので、執筆に苦労しました。

藤原氏は『満州、少国民の戦記』という詳細な回想記を出版されておられますので、私も短いエッセーくらいは纏められるのではなからうかと思ひ立つたものの、微かな記憶が

頼りでは覚束なく、両親や当時お世話になった方々が存命中にいろいろ聞いておけばよかったですと後悔すること頻りでした。

さらに驚いたのは、このエッセーを読んだ子供たちは誰一人、父親がこのような経験をした事実そのものを全く知らず、初耳であったということでした。そういえば、小学生の頃のことを子供たちに話したことはなかったのです。

この反省を踏まえて、満州時代のことだけではなく、生涯に亘っての自分史を纏めておこうかと、思い立った次第です。

銀行時代にはものを書く習慣はなかったのですが、退職後にぼつぼつ書き始め、20年前には「岡部陽二のホームページ」を立ち上げて、すでに500編以上を収載しております。自分史はこの空白を埋める形で作成し、年内に30回くらいの連載として紙媒体での刊行ではなく、インターネット上の公開を主とする計画を立てているところです。さらに、このホームページを没後30年はそのままネット上にキープしてもらえの方策を模索中です。

<http://www.y-okabe.org/> を覗いていただければ幸いです。